

「脳神経科学とポジティブ心理学」研究会趣旨

第1回研究会 2015.5.24 稲垣久和

「脳神経科学とポジティブ心理学」(A-1) 研究会で行いたいことは、一口で言うと、皆が幸福になる社会を形成する基礎は何か、ということです。それは脳の働きと関係しているでしょう。脳という生理的物質があって自己意識があるのですが、脳と心の関係について多くの哲学的、科学的、場合によっては宇宙論的、宗教的問いが潜んでいます。

賀川豊彦の『宇宙の目的』(1958年)という本の英訳が最近出版されました(2014年3月)。<http://www.cornerstonechristiansupply.com/product.asp?sku=9781625645098>

彼はこの本で物質から人間の意識までを選択的な進化律を展開することによって構成していますが、その中で「志向性」にふれて次のように述べています。

「インマヌエル・カントの時代はニュートン式機械的宇宙時代であって、宇宙に指向性の選択律のあることすら気づかないでいた」(日本語版 294 頁)。「『脳』は自決目的を完遂するための必要なる過程であり、この過程なくして『私』はない。しかし、『私』は目的と目的とをつなぐ合成目的であり、かつ単一目的であり、かつ第一目的である。すなわち、『私』は『自決』そのものである。この自決経験の総合が『私』の個性である」(439 頁)。

このような内容の本が 50 年以上もたって英訳されたのは、日本の民衆的ベストセラー作家で社会実践家であり、平和運動家の(ノーベル平和賞に 3 回もノミネートされた)人物が、独自の壮大な自然哲学を展開していた事実を世界の人々に知らしめるためでした。あらゆるものが断片化されてしまった今日、もう一度、人間の文明の総体を問う試みをしたいと思う次第です。英訳編集者のトマス・ヘイスティグス博士も Templeton 財団からの助成を受けてこの翻訳作業を行いました。

私たちの研究会はこの「志向性」を中心に脳と心の研究をしたウオルター・J・フリーマン理論、ニューロン集合の脳カオス理論の検証から始めます。それと拙著『実践の公共哲学』(82 頁以下)でも紹介した物理学からの説明「量子場脳理論」との関係はどこにあるのか(脳波の解釈はどうか?)。他方で、イギリスの理論物理学者で神学者のジョン・ポーキングホーンは『科学時代の知と信』(岩波書店、1999 年)の中で複雑系の科学の存在論的解釈を独自の仕方で行っています。カオスのストレンジ・アトラクターの通る軌道がすべて同じエネルギーに対応しているために、エネルギーの出し入れなしに、「そのエネルギーの中身は、何が起こっても影響を受けないのである。位相空間を通る軌道が異なることによって違ってくるものは、それが示している活動的な発展の中で展開していく形式である」。そして、ここでその形式を支配しているのはまさにある種の「情報」(＝意味)です。この情報(＝意味)の出し入れはエネルギーの出し入れなしに継続します。これはカオス理論の際立った特徴です(85 頁)。

意識とは脳の大域的アトラクターであるとの解釈は、これらと整合性を持っているでしょうか? 興味は尽きません。活発な議論がなされることを期待いたします。

第3回 A-1 研究会 脳神経科学とポジティブ心理学 概要報告

2015.05.23 | TKP 御茶ノ水ガーデンシティ

発題：小林正弥 | 政治哲学・公共哲学／千葉大学 法政経学部 教授

浅野孝雄 | 脳神経外科学／埼玉医科大学名誉教授

小林正弥氏は近年のポジティブ心理学をアリストテレス実践学として裏づけ、そこから現代的な展開を試みようとしています。まず①マーティン・セリグマンらの開始した楽観主義研究、②セリグマンとクリストファー・ピーターソンが開始した人格的強みと美德に関する研究、③ミハイ・チクセントミハイのフロー理論、④バーバラ・フレデリクソンらのポジティブ感情の研究、⑤ソニア・リュボミラスキーらの持続的幸福の研究などを踏まえながら、まずはポジティブ心理学とアリストテレス哲学との関係を話されました。

ポジティブ心理学は、心理学として実証的・科学的であると同時に幸福（アリストテレスは人間の究極の幸福をエウダイモニアと表現した）を目指すという意味で規範的・哲学的である。ただし主観的な快・不快のレベルで幸福を定義するものがポジティブ心理学であるとする、それは必ずしもアリストテレス的なものにはならない。心理的な幸福（良好状態）がその人の徳の達成といかに結びつくかが論点になっている。良好状態は以下のような頭文字（PERMA）によって計測可能になる。ポジティブ感情（positive emotion）、従事（engagement）、ポジティブ関係（positive relation）、意味（meaning）、達成（accomplishment）。これらはマズローの欲求階層理論とも対応可能であり、5つの柱の5次元幸福理論である。

このように、ポジティブ心理学は、ポジティブ倫理学と連携することで、総合的なポジティブ心理学・倫理学における幸福の道を探求しつつ、多次元総合的幸福論を目指すことができると小林氏は提起されました。

これに対して浅野孝雄氏から以下のコメントがなされました。

アリストテレス哲学が現代にも通用する時間と場所を越えて普遍性をもつかどうか。アリストテレスを持ち出すのであれば、たとえば主観的な幸福感は今日の脳科学では「部分的にはドーパミンやアセチルコリンの放出の脳機能の活性化」などと説明されるので、より長く自己が意識して人生に全力を尽くす「目的（teros）」とともに語られなければならないのではないか。また東洋においては、幸福感も異なるのではないか。幸福や美德よりも、人生は苦であり、人間の本性は悪である（煩惱から逃れられない）と観じたブッダの考えの方がより現実的・具体的なところもあった。もし5次元幸福理論が3次元幸福理論として再定式化できるとすれば、ジョナサン・ハイトが「社会空間における3次元」として示したX・Y・Z軸のそれぞれに対応するような情動モジュールが実際に脳内に存在することが見出されるかもしれない。それはポジティブ心理学が認知科学に先行して有効な作業仮説をつくり出すことを示すよい機会となるであろう。

こうした提起をもとに議論が展開されました。（稲垣久和）